

教員養成に対する理念及び認定課程設置の趣旨等

1. 大学・大学院としての教員養成に対する理念及び認定課程設置の趣旨等

教育理念「人間になろう」は、豊かな人間性・広い学問的教養・高い専門的知識・能力を有する女性の専門的職業人の育成を目指して、掲げられたものであり、この建学の精神により本学の教育は形作られている。この建学の精神は、人間尊重の精神に基づき、自己のより高い人間性の涵養を目指して、絶え間ない自助努力と自己実現に価値を置くものであり、女性の優れた資質・能力とともに、高い職業的能力の育成を目指したものである。また、「確かな学力」・「豊かな人間性」・「健やかな体」を柱とする学習指導要領の「生きる力」とも重なるところが少なくない。教員という職業は、男女共同参画社会が叫ばれる以前から、女性のために開かれた職業であり続けてきたが、多様な職業が女性に開かれている今日にあっても、教師という職業には根強い女性の志向性がある。こうした背景から、教員の養成は、女性の資質を生かしたキャリア教育の一環として極めて重要であるために、各学部学科で個別指導含めて啓発的な指導を行うものとしている。

こうした理念の下、本学ではすべての学部学科（一種免許状）、研究科（専修免許状）に教職課程を置いているが、いずれの学部学科も豊かな人間性と高い専門性の養成を目指すものとしている。

また、本学園は保育所・認定こども園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学・大学院を擁する総合学園であり、特に平成19年度に教育学部を発足させて以来、教育実習はもとよりそれ以外でも多様な側面で、併設校・附属学校・附属園の活用、また地域の学校とも連携した教員養成に務めている。

2. 認定を受けている課程を有する学科等の教員養成に対する理念及び設置の趣旨等

● 生活科学部管理栄養学科（中一種免（家庭）・高一種免（家庭）・栄一種免）

本学科の属する生活科学部は、家政学部時代より長年多数の教員を育成し、愛知県及び近県の家庭科教育及び家庭科教員養成に大きく関わってきた。卒業生はこの地域の家庭科教育を担う一員としての強い責任感を持って職に就いている。今後も幅広く高度な専門性を持って生活科学および家政学を身につけた家庭科教員を輩出し続けることは、本学部・学科の使命でもあると考えている。

本学科は、戦後より栄養士資格を有する家庭科教員の養成に早くから取り組み、長年優秀な人材を育成してきた歴史がある。家庭科教員は大学における家政学・生活科学を「家庭科」という教科を通じ、次世代に伝える役割も持っており、本学部および学科で家庭科教員を養成することは、日々研究を重ねている家政学・生活科学を社会に伝える役目も持つと考えられる。特に本学科は、現在は管理栄養士資格を取得することを目標とした学科であり、栄養教諭と家庭科を併せ持つ教員を育成することも出来る。栄養に関する高い専門知識を持ち、加えて、家庭科教員としての他領域も習得し、生活全般を総合的に考えることの出来る教員を育成できる。また本学科は、食育の今日的な課題に取り組める人材育成の場であると考えている。以上の理由より、栄養教諭ならびに家庭科の教職課程を設置している。

● 生活科学部生活環境デザイン学科（中一種免（家庭）・高一種免（家庭））

本学科の属する生活科学部は、家政学部時代より長年多数の教員を育成し、愛知県及び近県の家庭科教育及び家庭科教員養成に大きく関わってきた。卒業生はこの地域の家庭科教育を担う一員としての強い責任感を持って職に就いている。今後も幅広く高度な専門性を持って生活科学および家政学を身につけた家庭科教員を輩出し続けることは、本学部・学科の使命でもあると考えている。

本学科は、裁縫女学校に始まる被服領域の養成校でもあり、戦後早くから家庭科の教員養成に取り組み、優秀な人材を育成してきた歴史がある。家庭科教員は大学における家政学・生活科学を「家庭科」という教科を通じ、次世代に伝える役割も持っており、本学部および学科で家庭科教員を養成することは、日々研究

を重ねている家政学・生活科学を社会に伝える役目も持つと考えられる。特に本学科は、現在、アパレル・メディア分野、インテリア・プロダクト分野、建築・住居分野の3分野を有しており、被服領域を専門とする教員、全国でも数少ない住居領域を専門とする教員を育成している。このことは、中部地区のみならず、全国の家庭科教育の教員養成や家庭科教育研究に寄与する部分は大きい。以上の理由より、家庭科の教職課程を設置している。

● 国際コミュニケーション学部国際言語コミュニケーション学科（中一種免（英語）・高一種免（英語））

EUが複言語・多文化政策を採用し、ASEANの会議では英語が使用言語となるなど、母語以外に共通の言語を持ち、その言語を用いて意思疎通を図ることは、グローバル社会の安定と発展に欠かせないものとなってきている。国際社会を取り巻くこのような状況の中で、中学校や高等学校での英語科教育を通して、異文化を理解し、異文化の人のことばを聴き取り、異文化の人に向けて自分たちの文化や考えなどを発信できる能力を備えた人材を育成していくことは極めて重要なことである。

国際言語コミュニケーション学科では、異文化理解に裏打ちされたコミュニケーション能力および、海外の企業や外国人と緊密な交渉のできる、英語での自己表現能力を身につけることを目的としている。そのために、外国人教員によるディスカッション形式の授業を教育の中心に置き、英語の総合的コミュニケーション能力の向上を図っている。また、多様な専門科目群の履修を通して、海外事情や異文化を受動的に理解するだけでなく、修得した知識と情報を能動的に活用できる能力も養成している。

こうした本学科での学修を基盤にして中学校教諭一種免許状（英語）や高等学校教諭一種免許状（英語）の取得資格を得た者は、英語科の教師として十分な英語運用能力と言語としての英語や異文化理解に関する専門的知識を身につけていることになり、それは畢竟、上で述べたような国際社会の要請に呼応した人材を養成するための基本的能力を修得していることを意味している。

さらに本学科では、英語科教育に関わる専門的能力は言うまでもなく、生徒の全人的発達に寄与できる豊かな人間性も兼ね備えた中学校・高等学校の教員を養成することを通して、男女共同参画社会において期待される専門的職業人としての女性の一層の社会進出を支援することも目指している。

以上が、本学科の教職課程設置の趣旨である。

● 国際コミュニケーション学部表現文化学科（中一種免（国語）・高一種免（国語））

国際化が進み、多くの情報・ヒト・モノが国境を越えて移動していく現在の世界において、多様な文化・多様な価値観を持つ者同士がコミュニケーションを図る機会はますます増えてきている。そうした中で私たちに求められているのは、異文化についての理解を深めながら、自分が帰属している社会のあり方や文化のありようを正しく認識することである。「世界のなかの日本」という観点に拠りながら、自分が立脚する場所を過去から未来へと連続する時間の中で捉えていき、過去に対しても未来に対しても責任の持てる人間になること。そして、自己を成り立たせている「ことば」に向き合い、他者を成り立たせている「ことば」とぶつかりながら、自分らしい表現を創造していくこと。国際コミュニケーション学部表現文化学科では、以上のような理念に基づき、日本語と日本文化についての基礎的な能力を身につけた教員、変化する時代や社会に対応できるような高度な専門的知識と実践能力をもった教員の養成を図っている。

本学科で取得可能な中学校教諭一種免許および高等学校教諭一種免許のいずれも「国語」であるが、教員を志望する学生に対しては、日本語・日本文学・日本文化に対する知識の習得のみを求めてはいない。「世界のなかの日本」という観点で国内外で活躍することのできる子どもたち（生徒）を育てていくために必要な資質を、大学四年間で身につけてもらうことを目指している。そのため、古今東西の様々な表現や文化について学びながら、国語科教育に必要な高度な専門知識と実践能力を獲得するよう、学生に対して促している。

また、本学科では国語科教育に関わる専門的能力の他にも、生徒の全人的発達に寄与できる豊かな人間性

をも兼ね備えた中学校・高等学校の教員を養成することを通じて、男女共同参画社会において期待される専門的職業人としての女性の一層の社会進出を支援することも企図している。

以上が、本学科の教職課程設置の趣旨である。

● 人間関係学部人間関係学科（中一種免（社会）・高一種免（地理歴史）・高一種免（公民））

本学科の教員養成の理念は、人間と人間関係に関する幅広い学問的知識基礎、深い洞察力および総合的な判断力をもって、今日の学校教育における人間関係をめぐる諸問題を的確に捉えたうえで、そうした諸問題に対して意欲的かつ実践的に取り組む態度と問題解決能力が具わった教員が社会的に期待され要請されていると考え、そうした期待や要請に応えられる教員を養成しようとするところにある。この理念を実現するために、人が現代社会で生きていくときに直面するであろう、人間関係をめぐる下記の三つの問題を軸にして学ぶように、指導し方向づける。①家庭・学校・職場・地域など、人が生活するさまざまな場での「人間関係」をめぐる問題。②子どもや青少年の在り方・生き方をめぐる問題。③現代社会の中で自分自身がどう生きようとするかをめぐる問題。こうした指導と方向づけのもとで学びを積み重ねることを通して、深い洞察力や探究力および総合的な判断力を培うことのできた教員、これが本学科として養成したい教員像である。

上記のようにして、人間関係をめぐる現代的問題に向けての洞察力や探究力および総合的な判断力を培うことを土台として、今日の教育問題に真正面から立ち向かい対処することのできる中学校社会・高等学校地理歴史・高等学校公民の教員を教育界に送り出すために、また、女性がプロフェッション（専門職）として活躍できる場を切り開くためにも、教職課程を設置した。

● 人間関係学部心理学科（中一種免（社会）・高一種免（公民））

本学科の教員養成の理念は、人間と心理に関する広範な学問的知識基礎、深い洞察力および総合的な判断力をもって、今日の学校教育における人間と心理をめぐる諸問題を的確に捉えたうえで、そうした諸問題に対して意欲的かつ実践的に取り組む態度と問題解決能力が具わった教員が社会的に期待され要請されていると考え、そうした期待や要請に応えられる教員を養成しようとするところにある。この理念を実現するために、人が現代社会で生きていくときに直面するであろう、人間と心理をめぐる問題に対して主として<心理学の視点>から理解し共感できるようになるための知識や技術について学ぶように、指導し方向づける。その学びは、次の四つの内容領域に分けることができる。①心のはたらきや仕組みについて学ぶ領域。②心の発達と成長について学ぶ領域。③傷ついた心のケアについて学ぶ領域。④心と身体の問題や環境と心の問題など、心をめぐる諸問題について学ぶ領域。こうした指導と方向づけのもとで学びを積み重ねることを通して、深い洞察力や探究力および総合的な判断力を培うことのできた教員、これが本学科として養成したい教員像である。

上記のようにして、人間と心理をめぐる問題に対する洞察力や探究力および総合的な判断力を培うことを土台として、今日の教育問題に真正面から立ち向かい対処することのできる中学校社会・高等学校公民の教員を教育界に送り出すために、また、女性がプロフェッション（専門職）として活躍できる場を切り開くためにも、教職課程を設置した。

● 文化情報学部文化情報学科（高一種免（情報））

現在は、知識や情報技術が様々な活動の基盤として存在する知識基盤社会である。それは同時に、生活のスタイル、コミュニケーションの手段や方法、社会の仕組み、規範意識等々に大きな変化を求めることとなり、様々な課題を浮かび上がらせる結果となっている。知識基盤社会では、「知識に国境がなく、グローバル化が一層進む」「知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる」「知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる」「性別や年齢を問わず参画することが促進をされる」とされ、知識重視の教育の目標として、幅広い知識・柔軟な思考力・

創造性などの育成が重視されている。

本学科では、このような社会を生きるための教育として、単に知識を増やすだけでなく、情報の視点から人間と文化、社会との新しい豊かな関係を学び、国際化し多様な文化の共生する現代に求められる幅広い知識と教養を持った人材を養成するため、「文化・アーカイブス」「アジア・地域・ツーリズム」「社会・ネットワーク」「情報・コンピューティング」の領域を設定している。

本学科の教員養成では、学科の持つ幅広い学問領域に関する知識と情報や情報学の専門的能力より、いかに急激な社会変化であっても、自ら課題を発見し、学び考え、主体的に判断し行動すること、そして、常に健全な社会の創造に貢献できるよう問題を解決する資質や能力を養うことなどに重点を置き、情報社会を生きるために必要な基礎的知識や方法を身に付け、柔軟に的確に対応できる高度な専門的能力と豊かな人間性・社会性を兼ね備えた教員の養成を目指している。

そして、情報や情報学分野に関わる専門的能力に加えて、芸能や図書、物質文化など文化の具体的な諸相について学ぶことで身に付く「文化を使いこなす」力、日本・アジアの社会および地域文化への理解とコミュニケーション能力、社会と組織、人と人とのネットワーク、情報ネットワーク、それぞれの関連について、社会学、経済学などの社会科学的アプローチでの理解が結びつくことで、情報技術や情報学教育、教育の情報化に関する最新の知識と実践的な技能を活用し、男女共同参画社会にも貢献しうる教員の養成を目指すことを設置の趣旨とした。

● 文化情報学部メディア情報学科（高一種免（情報））

近年、情報通信技術が急速に進歩発展し、それに基づく高度な機能をもった情報機器が多くの人々に普及して日常生活に深く浸透したことにより、メディア環境が大きく変貌しつつある。これに伴い、放送、新聞、出版を主とする従来のメディアに加えて、インターネットを基盤とするホームページが主要なメディアとして台頭してきた。

また、携帯電話の普及は、日常生活において人々のコミュニケーションの様態を大きく変化させた。

メディア情報学科では、メディア環境の変化の中で人間と社会がどのような影響を受けているかを探求しさまざまな問題の把握とその発生メカニズムを理解できる能力を学修する。

メディア情報学科の教員養成の基本理念として本学科で養成された教員が、単に表層的、技術的な知識ばかりでなく、人間と社会を見据えた視点を持って、生徒に情報科学に関する知識を教授できることを目標とする。

現代社会はメディア環境が急速に進歩発展している。そのインフラをなす情報通信科学技術、特にインターネットと携帯電話については、近年幅広い人々に行きわたっているが、青少年においても早い頃から日常生活の中でそれらと密接に関わってきている。大半の生徒は、パーソナルコンピュータを始めとする情報機器の利用に関する実用的な技能を身に付けていると察せられる。しかし、今なお情報通信技術は日進月歩の発展過程にあり、このような情報に関する環境の変化に対応すべく、高校における情報科目においては、情報機器の基礎的しくみや特性、および諸機能に関する正確な知識を習得する必要がある。

青少年の育成において、メディア情報にかかる様々な課題に対応する教師の役割は、今後、ますますその重要性を増すものと思われる。メディア情報学科での学修を基盤にして高等学校教諭一種免許状（情報）の取得資格を得た者は、人間と社会の両者を見据える視点から情報のあり方を論考する基礎的知識と洞察力を身に付けることができ、上で述べたような社会的要請に呼応した能力を修得していることを意味している。したがって、メディア情報学科では、教職課程を設置することで、社会的に必要とされる素養を持った教師を育成することが可能である。

● **現代マネジメント学部現代マネジメント学科（中一種免（社会）・高一種免（公民）・高一種免（商業））**

国際化、情報化が進み、価値観が多様化している現代社会において、マネジメント能力は、企業のみならず、個人や家庭の生活、地域行政、国家・国際分野に至るまで、さまざまな場面で求められている。本学科では、経営、経済、法律、政治に関する知識を拠り所に、目標の実現に向けてヒト・モノ・カネ・情報などを活用し、筋道を立てて合理的に課題を克服していくマネジメント能力を備えた学生の育成を目指している。教員養成においても、学部・学科の特性を活かし、現代社会の特徴と今後の社会の変化の方向性を適切に理解し、マネジメントに関する高度な専門的知識と実践的能力を有する教員を育成することを目標としており、一方で、経済、法律、政治に関する専門教育科目の履修を通して中一種（社会）ならびに高一種（公民）の教員に必要な知識や態度を、他方で、経営、経済に関する専門教育科目の履修を通して高一種（商業）の教員に必要な教員知識やスキルを修得させる。また、その結果として、当該学部・学科においては、グローバルな思考と現代社会を分析するセンスをもち、柔軟で実践性の高い問題解決能力を備えた教員を輩出することを目標としたい。

当該学部・学科の前身である生活科学部生活社会科学科では、家政系学部の一学科として、地域に多くの家庭科教員を輩出してきたが、平成15年度に同学部同学科を現代マネジメント学部現代マネジメント学科として再編成するにあたり、過去の教員養成の実績の上に立ち、さらに上記の新たな教育目標に鑑み、中一種（社会）、高一種（公民）、高一種（商業）の教育課程を設置することとした。中一種（社会）、高一種（公民）では、専門教育科目で身に付ける社会的課題の多面的な考察力や問題解決能力を学校教育における子どもたちの基礎的、発展的な能力育成に活用するために、高一種（商業）では、専門教育科目で培うビジネスの合理的な遂行能力を高等学校で商業に関する学科に学ぶ子どもたちの実践的能力育成に活用するために、それぞれの課程を設置することにした。各課程の設置はまた、中学校及び高等学校の教員をめざす学生たちのニーズにも応えるものであるといえる。

● **教育学部子ども発達学科（幼一種免・小一種免・中一種免（数学）・中一種免（音楽）・高一種免（数学）・高一種免（音楽））**

今日、わが国では、グローバル化、高度情報化、都市化、少子高齢化、核家族化といった急激な変化が進行し、地域社会の人間関係が複雑化・希薄化、人々の価値観が多様化する中で、学校教育に求められている課題はより複雑化・高度化してきている。こうした新たな時代的变化に対応し、新たな技術や文化の創成に寄与しうる次世代の人材育成という視点から、学校教育の変革が叫ばれ、その新たな教育の担い手としての教師像や教員養成の在り方が、わが国や社会の喫緊の課題となっている。一方、教育現場では、いじめや不登校、子ども被虐待、LD・ADHD・自閉症スペクトラム障害といった発達障害、異なる文化的背景を有する外国籍の子どもといった多様な子どもたちへの教育的課題が山積し、教師には「教師力」あるいは「実践的指導力」と呼ばれる子どもの理解と教育について、より高度な専門的知識・技術が求められている。また、高度技術社会と呼ばれる学問・科学技術の急激な発展・高度化に伴い、各教科で扱う内容と教授方法について、教師自身による継続的な学びや研究が不可欠のものになっている。一方、学校教育の目的は、社会が必要としている知識・技術の獲得のみならず、古く「人格陶冶」と呼ばれたように、子どもたちの健全な社会性やコミュニケーション能力、人間性の育成といった目的が依然として重要である。そのための基盤として、教師自身の責任感や倫理観、人間愛、子どもたちへの共感的理解能力、健全な人間関係を形成する能力、リーダーシップ、高度なコミュニケーション能力といった「総合的な人間力」を有する人材の育成がきわめて重要である。

そこで、本学部は、このような社会の変化、教育の課題に的確に対処しうる、幅広い教養を備え、高度な専門的知識・能力と豊かな人間性・健全な社会性を兼ね備えた、ヒューマン・ワーカーとしての幼児教育・初等中等教育の教師・保育士の目的養成を目指し、広く地域の教育界に貢献すると共に、男女共同参画社会に

において期待される専門的職業人としての女性の一層の社会進出に支援の手を差し伸べるために教職課程を設置する。

本学科には、保育士の同時取得を目指した幼稚園教諭、幼稚園教諭または中学校・高等学校教諭との複数学校種免許の同時取得を可能とする小学校教諭、算数又は数学の指導に長けた中学校・高等学校教諭（数学）、豊かな芸術的感性と演奏技術を兼ね備えた中学校・高等学校教諭（音楽）の教員養成課程を設置する。

● 看護学部看護学科（養一種免）

我が国の保健・医療・福祉をめぐる環境は、急速な少子高齢化の進展、患者や地域住民の意識・ニーズの多様化、医療技術の進歩等から大きく変化してきており、養護教諭を含む看護職者には、より患者（児童・生徒）の視点に立った質の高い看護の提供が期待されている。21世紀のこれからの保健・医療・福祉の現場においては、援助に携わる専門家に対して、基礎医学をはじめとして、多様な専門分野の知識・技術が教育され、多様な専門家との連携協働ができる人材であることが求められている。

さらに養護教諭が関わる子どもたちを取り巻く社会的な背景として、虐待などの心理社会的な課題が指摘され、子どもたちが示す援助へのニーズもまた複雑化してきている。学校保健を担う養護教諭にとって、医学を含む高度な専門的知識に加えて、子どもたちとの関係を構築し、その潜在的なあるいは顕在化した課題に共に取り組もうとする質の高い援助技術が今まで以上に期待されている。さらに学校というコミュニティの中で、子どもたちが安定して成長・発達することを可能とするために、予防・健康増進を推進する健康教育の専門性を十分に発揮できる養護教諭の養成が期待される。

看護学部は、学園の教育理念「人間になろう」の精神に則り、生命の尊厳と人間に対する総合的な理解に基づき、健康の回復と維持・増進に関わる看護に関連する専門の学術を教授研究し、看護職者として必要な専門的知識と優れた技術、そして人々の健康な生活に貢献できる創造性と高い倫理観を備えた人材を養成することを目的としている。専門課程で学ぶ医学的専門知識及び技術と、様々な臨床の現場で学ぶ臨地実習体験から看護職者としての幅のある教養と理解を深め、また学園の教育理念にも通じる人と人との心通う人間関係の中で、自らの専門性を役立て、社会に貢献しようとする態度によって、援助対象である患者（児童・生徒）の価値観を尊重し、対象の立場を理解した上で、個人や地域の課題を解決し、生涯にわたって知識・技術の研鑽に努める看護職者を養成する。

本学部では、学部設置の趣旨を背景として、希望する学生に対して、養護教諭一種免許状を取得できる教職課程を置くこととし、卒業要件の科目・単位に加えて、免許状取得に必要な科目を習得した学生は、卒業と同時に養護教諭一種免許状を取得可能とした（定員10名で、1学年終了時に希望者に対する選考試験を実施）。本学部において、看護・保健の専門的な知識及び技術を身につけた養護教諭を養成することは、学校保健分野における社会的要請に応えるものである。

● **生活科学研究科食品栄養科学専攻（中専免（家庭）・高専免（家庭））**

本研究科の母体である、管理栄養学科および生活環境デザイン学科からなる生活科学部は、家政学部時代から長年にわたり多数の教員を養成し、卒業生は愛知県および近隣地域の家庭科教育に大きく貢献してきた。本研究科では、そうした学部教育課程に加えて、より高度な生活科学の専門性を有する家庭科教員（中学校・高等学校教諭専修免許）を養成することが社会的使命である。

管理栄養学科は、愛知県を中心とした東海地域において栄養士管理栄養士を輩出してきたが、現在は管理栄養士の国家資格を取得することを一義的な目標とした学科となっており、家庭科教員（中・高）に加えて栄養教諭養成も行っている。生活科学研究科食品栄養科学専攻では、管理栄養士としての食品、栄養、および健康に関する高度な専門知識を併せ持ち、生活科学全般を総合的に捉えることができ、中学・高等学校の教育現場において指導的な役割を担うことができる教員を養成していく。以上の理由より、家庭科の教職課程を設置している。

● **生活科学研究科生活環境学専攻（中専免（家庭）・高専免（家庭））**

本専攻が基盤を置く学部の生活科学部は、家政学部時代より長年多数の教員を育成し、社会に送り出している。本専攻では、そうした学部教育課程を基本として、より高度で先端的な専門性を持つ教育・研究を行っており、大学院でのレベルの高い家庭科教育に関わる生活環境学を修得した上で専修免許（家庭）を取得して、その資格を持つ教員を輩出しており、そのことは社会貢献の面からも本専攻の大きな使命である。

本専攻は、古くは裁縫女学校に始まる被服領域の養成校でもあり、戦後より家庭科の教員養成に取り組んできた歴史を有する学部を基礎として設置されたが、複雑化する社会や経済構造、変化する生活様式の中で、より高度な専門性を有し指導的役割を果たす家庭科教員の養成が強く要請されている。本専攻は、人間を核としてアパレルメディア、インテリア・プロダクト、建築・住居の3領域を有しており、学際領域も含めた高度で先端的な教育・研究を通して、幅広い専門性を持つ指導的な家庭科教員を養成できる専攻である。こうした教員養成のシステムは中部地区のみならず、全国の家庭科教育の教員養成や家庭科の教育・研究に大きく寄与するものとする。以上の理由より、家庭科の教職課程を設置している。

● **人間関係学研究科人間関係学専攻（中専免（社会）・高専免（地理歴史）・高専免（公民））**

人間と人間関係に関する幅広い学問的知識基盤をもち、本研究科において醸成された総合的な判断力と深い洞察力により、今日の学校教育における人間関係をめぐる諸問題を的確に捉え、また、現代社会における人間に関わる諸問題についての問題解決能力をとまなう実践的な教員を養成することを目指す。

本研究科は、臨床心理学、社会学、教育学の三領域からなり、人間と人間関係をめぐる現代的課題、もしくは人間と心理をめぐる今日の課題にたいする探究力及び問題解決能力を培うことを目的として開設され、今日の教育問題に直面し対処する中学校社会・高等学校地理歴史・高等学校公民の専修免許状を有する教員を養成する。また、女性がプロフェッション（専門職）として活躍できる場を切り開くのみならず、教員のリカレント教育のためにも、教職課程を設置した。

● **現代マネジメント研究科現代マネジメント専攻（中専免（社会）・高専免（公民）・高専免（商業））**

本研究科では、現代マネジメント学部における教員養成課程をベースに、より高度な専門的知識と、より豊かな人間性を有する教員の養成を目指すこととする。

本研究科で育成しようとする教員像は、研究科設置の理念等を踏まえ、以下の3点を特徴とする。

- a. 「イノベーションマネジメント能力」を有し、社会科学の諸領域における知識体系を複合的に活用して、現代社会における諸課題を適切かつ合理的に解決することができる教員
- b. グローバルな思考を有し、国際的な視野から地域の社会経済の発展のための諸方策を具体的に提案することができる教員

c. 豊かな人間性と経営・経済センスを有し、男女共同参画社会における知的リーダーとして、教育・研究能力を発揮できる教員

本研究科においては、上記の a～c のいずれの特徴をも具備し、広く多様な視点から現代社会を分析する力と、柔軟で実践性の高い問題解決能力を備えた教員を養成する。

● **教育学研究科教育学専攻（幼専免・小専免・中専免（数学）・中専免（音楽）・高専免（数学）・高専免（音楽）**

本研究科は、教員養成およびそのための研究を設置目的としており、教員養成の理念は本研究科の理念そのものである。

本研究科は、「人間になろう」との本学園の教育理念の則り、高い知性と豊かな人間性を持つとともに、現在学校教育に求められている教員の資質、特に思考力・判断力・表現力等を育成する高い実践的指導力を持ち、知識・技能の絶えざる刷新のために、教職生活全体を通して教育について探求し続けることのできる高度専門職業人としての教員を養成し、その要請のための理論的・実践的研究を行うことを目的とする。

この理念に基づき、本研究科における教員養成は次のような特色を持つものとして構想されている。

- a. 「研究し続ける教員の養成」を教育の主目的とし、そのための理論的かつ実践的な研究を行う。
- b. 教科教育の実践的研究を重視し、特に校種をまたいだ系統性、教科間の関連に配慮した研究教科指導法と教科専門とを架橋する研究を積極的に推進してその成果を教授する。
- c. 教科としては、基礎となる教育学部の特色に鑑み、音楽を含む表現系および数理系の教科を中心とし、それらの教科教育能力を持つ教員を養成する。
- d. 基礎理論と実践との往還により高度な教職についての知識能力を持った教員を養成する。
- e. 長期教育実習を必修化し、実践的な研究の場とする。これにより、理論的知識と実践力がより高度かつ均衡の取れた教員を養成する。
- f. 義務教育課程（小学校中学校教育）に重点を置いた実践的教育研究を行い、特に小中の接続にも配慮して、小中一貫した教育が行える教員を養成する。